

青髭 1 4

明宏訊

「あれを見るがいい。いわゆる堰だ。下流地域に住むものはあれで水を止められたら、もはや、まともに農を営むことが不可能となる」

小道から馬首を巡らしながら、カルッカソム伯爵は小枝と小枝に刻まれた先を指差した。

アンリは不快になった。べつに河の真ん中に建設された堰が不快なわけではない。ただ、それを巡る人々の氣勢がおぞましいのだ。それは現在、生きている人たちのものだけではない。過去から連綿と続く恨みのようなものが奇怪な仇花を咲かせている。

「…これだからいやなのです、平民たちが戦に関係するなどと…伯爵、失礼…」

「あのようなものたちに付き合わされるなら、自分たちで血を流した方がいいと申すか？」

「……」

主君の言わんとしていることがわかるからこそ、家臣としても返答に窮した。猫の額のように狭い土地からは互いに互い罵りあう声が響いてくる。その息遣い、彼らが頭に浮かべている、相手に対する殺意と一族に対する愛情、それらが複雑に折り合って不格好なモザイクを造っている。

「…息子…ジョフロアの息子よ…近づくと不快が増すか、それはいい感じ方だ」

一瞬、新しい従子爵は耳を疑った。いったい、この方は何を言っておられるのだろう、と、しかし、すぐに父親の名前が主君の口から迸ったことに安心した、というよりは自分を疑わずにはいられない。

「もはや、戦いが始まっているようですね」

「いや、そなたが到着しなければ何もはじまらない。今回のことで新しい戦について学んでもらわねばならない」

青い血が手ずから戦に参加することはまかりならぬというのが、啓蒙思想が目抜き通りを大手を振ってまわる昨今の流行ではなかったのか、主君の言葉に矛盾を見つけずにはいられない。

そう思ってしまえば最後、伯爵に心を見抜かれることは必定、アンリは経験から身構えた。

「そう心に鎧を着させるものではない、アンリ」

「ブーリエンヌ女伯爵閣下に懇意にさせていただいて、上位貴族の方々を交わったつもりですが、伯爵に仕えることで改めて、それを知らされました」

「そんなに余が恐ろしいか、ブーリエンヌはそうでないというのに？」

「閣下をご存じなのですか？」

驚いて見せたアンリだが、よく考えてみれば、お互い、7人いる王選定侯なのだから過去なれば互いに顔を合わせることも過去にはあったかもしれない。

「思えばナルボンヌから足が遠のいて久しいな…、彼の街がどんな風景だったか、記憶かがあいまいになりつつあるな」

老人のようなことを言う主君がおかしいかった。伯爵のこと、闇のものを多量に王都に配置しているにちがいないのだ。そこまで伸びた目と耳からあらゆる情報を得ている。仕える以前に漠

然として受けていた印象と実情はえらい違いである。世捨て人という流言はまったくウソだった。平民たちの間には悪意としか言いようのない噂話が出回っているが、それはおそらく、伯爵の敵対勢力なのだろう。その正体は用としれない。そもそも、新しい戦を家臣に学ばせるというが、アンリは口からついて出てきた言葉をそのまま宙に舞わせた。

「仮想敵は誰なのですか？」

「余がどのように答えるか、そなたはわかっているだろうか？」

リュネヴィル侯爵やモンモラシー伯爵、両家とは伝統的に鉱山や国境を巡っての争いが続いている。しかし、主君の本音がそんなところにあるとは間違ってもアンリは思っていない。そして、この場において彼がそこまで洞察していることを明言しないでほしいと、主君が感じていることにも気付いている。

底なし沼にはまりそうなところで、二人は目的地に到着した。しかし、馬の鼻先に赤い血の平民たちが自分たちに這いつくばる光景を目の当たりにするまで、そのことに気付かなかった。よくも落馬しなかったものだと、アンリは我ながら感心させられたが、そういう気分になっていることは許されない。

伯爵が軽く睨みつける。

「この者たちはそなたに拝謁しているのだぞ」

そうだ、彼らには伯爵が17歳の美少女にみえるのだった。それに気付いたところで、青い血の男たるものが、公の場にて女性にすべき礼儀を忘れていた。なんということだろう、さきほどアンリはそれを怠っていた。もっとも、あのときは魔法仕掛けになっていることに気付かなかったのだが、それでも国中に噂は広まることだろう。しかし、それをこの場にてやれというのではないでしょうね。アンリは恐る恐る主君の顔を仰ぎ見た。

「……」

主君は意味ありげに微笑を続けるだけだ。

「閣下……」

従子爵は運命には逆らえないとあきらめざるを得なかった。だが、とりあえずは貴種に生まれた者として威厳なりなんなりを示すべきだ。

這いつくばっている人間群の先頭にいるのは、名主だが、見上げた顔からはあきらかに何か期待していることがあることは確かなことだった。彼を含めたこの場にいるすべての人間には、伯爵が17歳の美少女にしかみえないのだ。おそらく、ギョイエン又従子爵が引き連れてきた女のようにしかみえていないちがいない。このような場合、彼がすべきことはひとつである。しかし、恐れ多くも主君の眼前に手を持っていくなどと…主君はいやらしい微笑を浮かべている、きっと、事のあらましを想定したうえでの変装にちがいないことが冷たい美貌に書き記してある。

わかりましたよ、やればいいのでしょうか。アンリは伯爵の眼前に手をもっていくと、何かを開くしぐさをした。たまたま、姿を見せた馬上のアンヌをみればわかるが、彼女は褐色、半透明のベールを顔にかけている。これが、貴婦人が公に場所に姿を現すうえでの礼儀なのだ。しかし、演技の心得のない彼には一連の行為がぎこちなく思えてならない。青い血を神のように思って

いる平民たちはともかく、アンヌは、ベールと鉄面皮、二重の盾のしたで笑っているにちがいない、アンリは二人に謀られているような気がしてすわり心地が悪い思いをしていた。

しかし、ええいままと、伯爵を彼が言うとおりに美少女に想像してみた。すると、恐るべきことが起こった主君が本当に17歳の美少女、それも彼がかつて見知った容貌になった。ブーリエンヌ女伯爵……それは彼が彼女の居城にてみた子供時代のポートレート、それから無意識のうちに美しく成長しつつある姿を敷衍した結果なのか、それが主君に結実したとでもいうのか、アンリは、思わず想像のなかでベールを開いた手を凍りつかせていた。

しかし、あまりにも自然に顔が接近していく、自分がやっていることをあたかも他者が観るようにアンリは観察していた。そして、ブーリエンヌ女伯爵もといカルッカソム伯爵の頬に口づけを与えていたのである。

そのとたんに、さすがに我慢できなくなったのか、あの鉄面皮のアンヌが肩を浮かしていた。なんと、彼女ときたら非礼なことに必死になって笑いを押し殺しているのだ。

伯爵といえば、アンヌ以上に失礼さを発揮していた。魔術の効力によって分厚い鎧を身に付けていることをいいことに、完全に身分に合わない様子で笑いこけていた。